

GET ビジネス学習館
2014 行政書士講座

第8回 行政法 テキスト補助

本書は、「著作権法」によって、著作権等の権利が保護されています。

本書の一部又は全部につき、無断で複製、複写その他の方法で記録されると、著作権等の権利侵害となります。

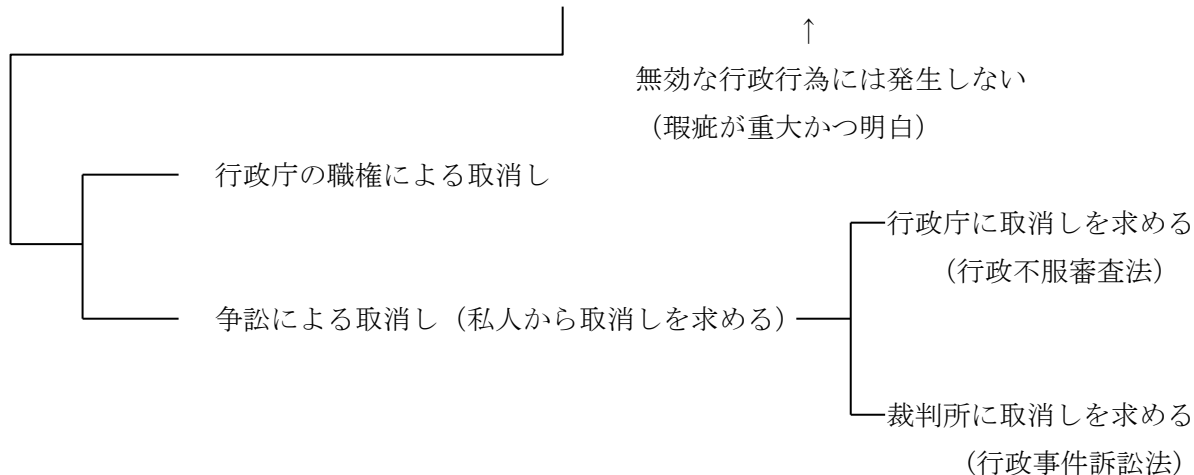
上記のような使い方をされる方は、あらかじめ岐阜ひまわり事務所の許諾を求めてください。

<http://ido.gyosei.or.jp>

第3章 行政不服審査法

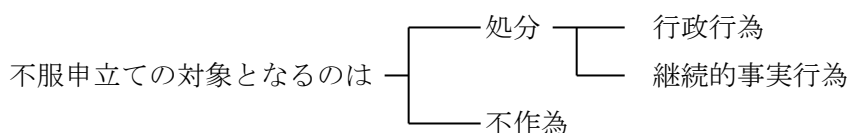
1 意義

瑕疵ある行政行為でも行政庁か裁判所が取消すまでは有効（公定力）



3 不服申立ての事項

1. 不服申立ての対象



2. 一般概括主義

（4条）行政庁の処分に不服がある者は、審査請求又は異議申立てをすることができる。

2

（この法律に基づく処分を除く）

3①

但し、次の各号に掲げる処分及び他の法律に審査請求又は異議申立てをする

3③

3②

ことができない旨の定めがある処分については、この限りでない。

一般概括主義とは、原則として全ての処分又は不作為について不服申立てを認める

↑↓（対義語）

列記主義とは、法律が特に列記した処分又は不作為についてのみ不服申し立てを認める

異議申立て・審査請求は、一般概括主義を

再審査請求は、列記主義をとっている

3. 不服申立てができない処分

② 他の法律で特に不服申立てができないとされている処分

行政不服審査法に基づいて、不服申立できるもの できないもの の具体例

- ★ 行政庁が弁明の機会の付与の規定に基づいてした処分は・・・
できる。(行政手続法 3 1 条は行政手続法 2 7 条の規定を準用していないから。)

- ★ 知事による行政書士に対する業務停止命令は・・・
できない。<行政書士に業務停止命令を行うには、聴聞 を行わないかんから。(行政書士法 1 4 条の 3 ③) 聴聞に関する規定に基づいて行った行政庁又は主催者の処分については行政不服審査法による不服申立はできない (行政手続法 2 7 条①)>

- ★ 市町村長がした婚姻の届出の不受理は・・・
できない。<戸籍事件に関しては行政不服審査法による不服申立はできない (戸籍法 1 1 9 条の 2)>

- ★ 市町村長がした転入の届出の不受理は・・・
できる。<住基法に基づいてした市町村長の処分に不服がある者は、知事に審査請求、市町村長に異議申立できる (住基法 3 1 条の 4)>

- ★ 労働委員会による労働組合に対する証明拒否は・・・
できない。<労働委員会のした処分については行政不服審査法による不服申立はできない (労働組合法 2 7 条の 2 6)>

4. 処分権主義

処分権主義とは、争訟手続の開始、その範囲の特定及びその終了については、当事者の自律的な判断に委ねられるという原則をいう。

(逆に言えば職権で審理が開始されたり、取下げに同意等を必要としたりしない)

元々は、民事訴訟の基本原則として用いられていた概念であるが、行政事件訴訟や行政不服申立てにも妥当し、不服申立ては不服申立人が原則として不服申立書を提出することで開始され (行政不服審査法第 9 条 1 項)、不服申立人は、裁決があるまでは、いつでも審査請求を取り下げることができる (行政不服審査法第 39 条)。

4 不服申立ての種類

異議申立て・・・行政庁の処分又は不作為に対して、処分をした行政庁（処分庁という）又は不作為に係る行政庁（不作為庁という）に対してする不服申立てを言う

審査請求・・・処分庁又は不作為庁以外の行政機関に対してする不服申立てを言う

原則：上級行政庁

例外：第三者機関（例）国税不服審判所や人事院

再審査請求・・・処分についての審査請求の裁決を経た後さらに言う例外的な不服申立てを言う

↓

再審査請求は、処分についての審査請求の裁決に対してすることができ、不作為についての審査請求の裁決に対してはすることができない

再審査請求は列記主義を採用している。すなわち次の場合には、処分についての審査請求の裁決に不服のある場合のみ再審査請求ができると規定されている。

8条①：法律・条例に再審査請求ができる旨の定めがあるとき

②：

3. 5 審査請求と異議申立の関係

① 処分に対しては

原則：「審査請求」による（**審査請求中心主義**という）

例外：「異議申立て」ができる時

(A) 処分庁に上級行政庁がない時

(B) 処分庁が主任の大臣、宮内庁長官、外局の長、外局に置かれる庁の長の時

(A)(B)の例外

法律又は条例が特定の行政庁に対する審査請求を認めている時は「審査請求」ができる

(C) 処分庁に上級行政庁はあるが法律により「異議申立て」が認められている時

↓

条例含まない。事に注意

(C) の場合、「審査請求」も「異議申立て」も両方できそうだが、先に「異議申立て」の決定を経たからでないと「審査請求」は、できない（**異議申立前置主義**という）

↓

異議申立前置主義の例外（「審査請求」ができる場合）

(ア) 処分庁が当該「異議申立て」をする事ができる旨を教示しなかった時。

(イ) 当該処分につき「異議申立て」をした日の翌日から起算して3ヶ月が経過しても決定をしない時。

② 不作為に対しては

原則：「異議申立て」「審査請求」かを自由に選択できる（自由選択主義という）

例外：「異議申立て」のみができる場合

(A) 不作為庁に上級行政庁がない時

(B) 不作為庁が主任の大臣、宮内庁長官、外局の長、外局に置かれる庁の長の時

5 不服申立ての手続

1. 不服申立ての方式

原則：書面を提出して行う（書面主義）

- ・ 審査請求は正副 2 通
- ・ 異議申立ては 1 通

例外：他の法律や条例で口頭による不服申立てが認められている場合には、口頭による申立て

2. 不服申立て人

(1) 処分についての不服申立人

処分により直接に自分の権利利益を侵害された者なら誰でも不服申立て出来る

※ 処分の直接の相手方に限らない事に注意

(2) 不作為についての不服申立人

申請をした者だけが不服申立て出来る

3. 不服申立て期間

(1) 処分についての審査請求の場合

(第1審の場合)

- ・ 処分があったことを知った日の翌日から起算して60日以内
 - ・ 処分があった日の翌日から起算して1年以内
- (上記2つは天災その他やむを得ない理由があるとき又は正当な理由があるときはその事由が消滅した日の翌日から1週間以内に限り延長が認められる)

(異議申立て後の審査請求 第2審の場合)

- ・ 決定があったことを知った日の翌日から起算して30日以内
 - ・ 決定があった日の翌日から起算して1年以内
- (上記2つは天災その他やむを得ない理由があるとき又は正当な理由があるときはその事由が消滅した日の翌日から1週間以内に限り延長が認められる)

(2) 処分についての異議申立て

- ・ 処分があったことを知った日の翌日から起算して60日以内
 - ・ 処分があった日の翌日から起算して1年以内
- (上記2つは天災その他やむを得ない理由があるとき又は正当な理由があるときはその事由が消滅した日の翌日から1週間以内に限り延長が認められる)

(3) 再審査請求の場合

- ・ 裁決があったことを知った日の翌日から起算して30日以内
 - ・ 裁決があった日の翌日から起算して1年以内
- (上記2つは天災その他やむを得ない理由があるとき又は正当な理由があるときはその事由が消滅した日の翌日から1週間以内に限り延長が認められる)

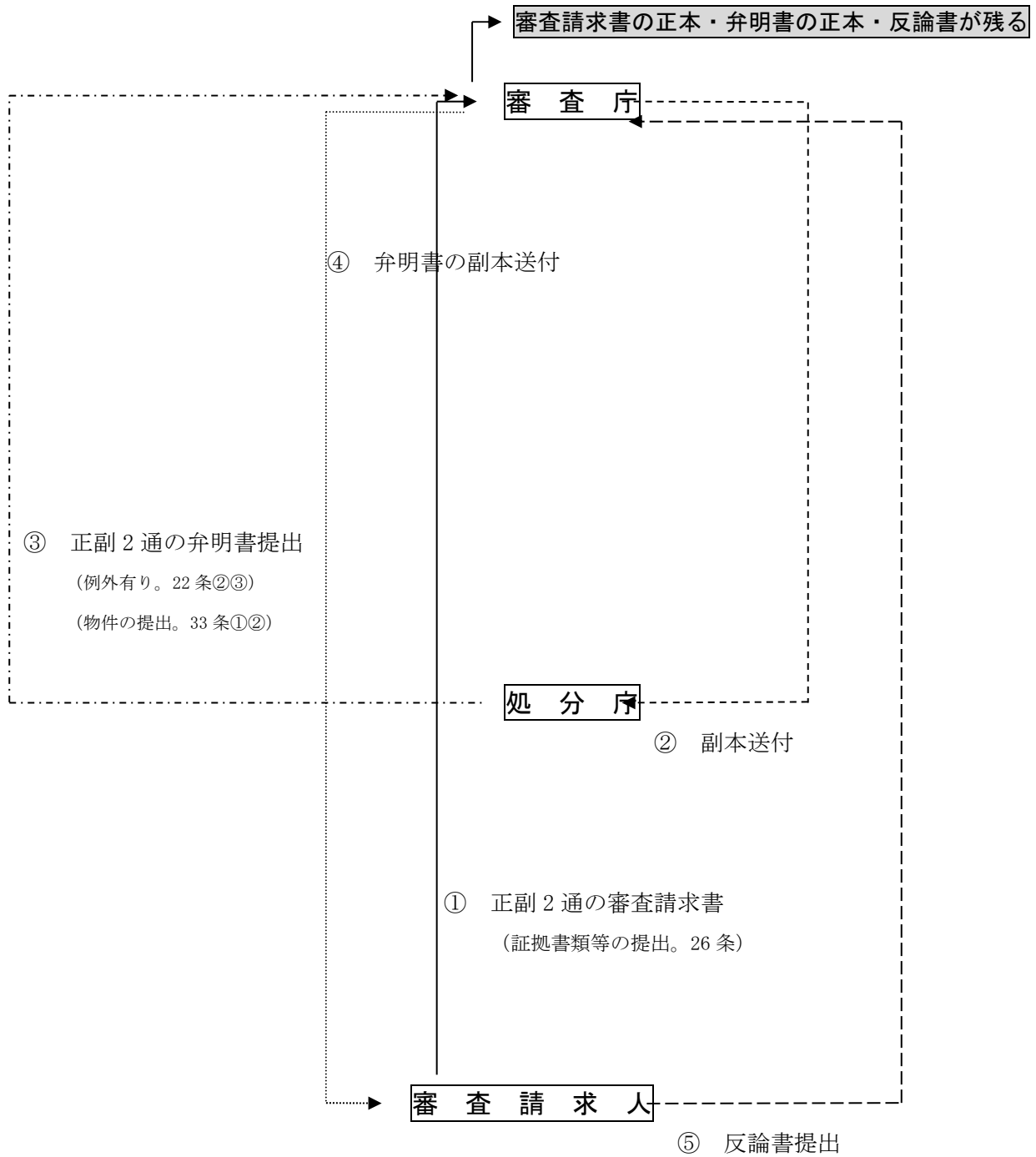
(4) 不作為についての不服申立ての場合

- ・ 不作為状態が続いている間はいつでもすることができる

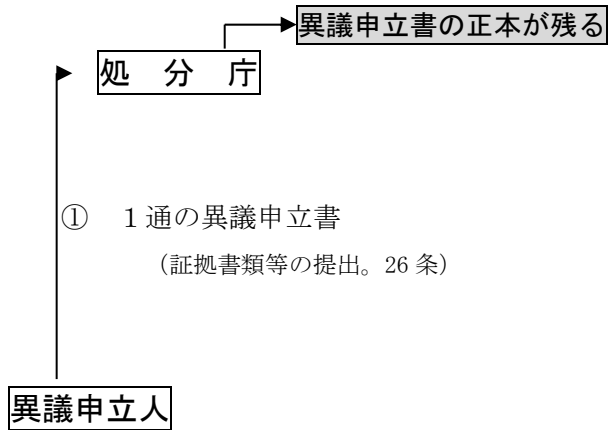
6 審理手続

2. 審理の過程

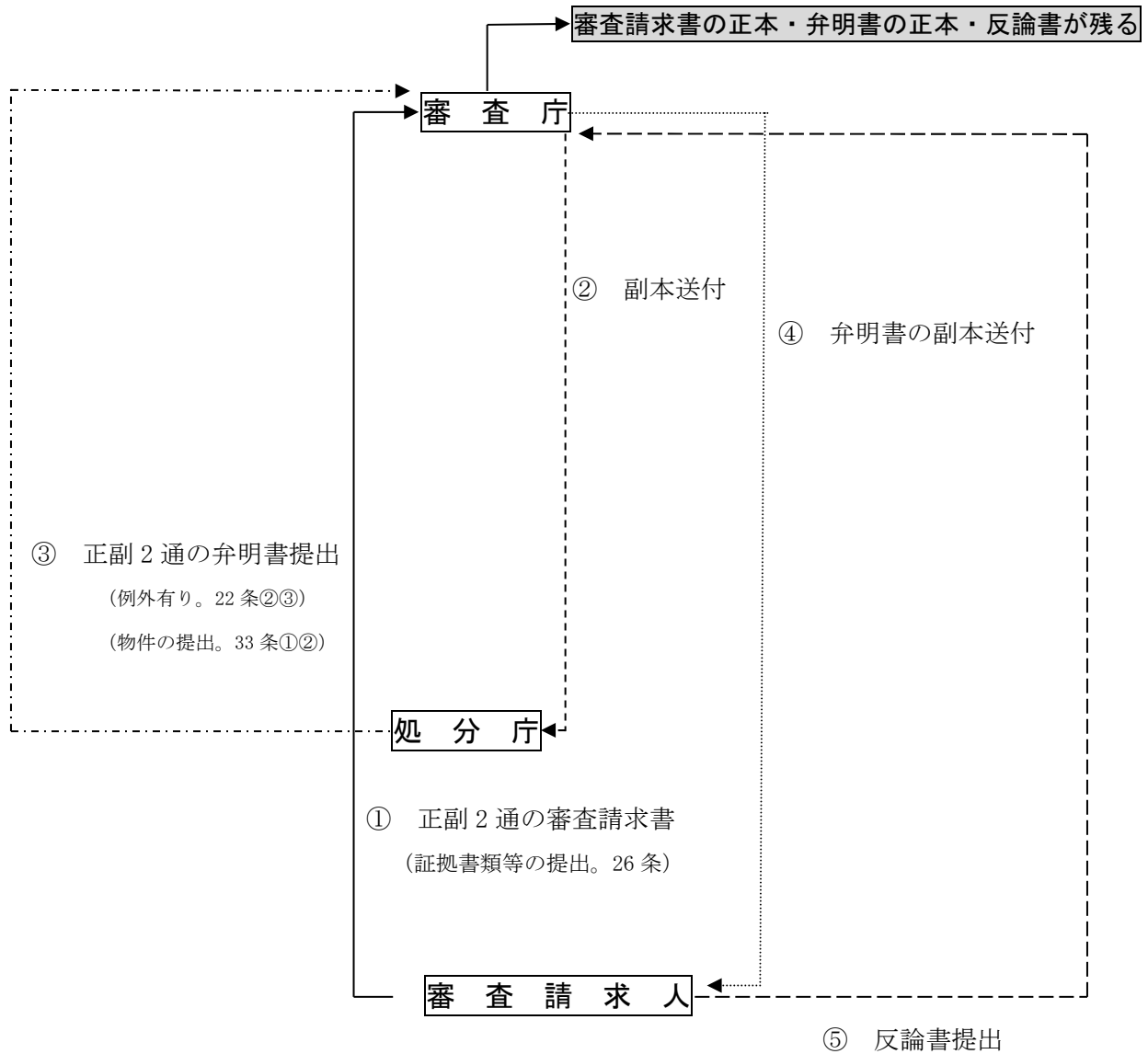
《処分に対する審査請求の場合》



《処分に対する異議申立ての場合》



《不作為に対する審査請求》



5. 証拠調べ

行政不服審査においては**職権探知主義**が採用され、行政事件訴訟においては**弁論主義**が採用されている。

職権探知主義とは、「事実」や「証拠」を審査庁（裁判所）が探し出してくる事。

弁論主義とは、「事実」と「証拠」の収集・提出する権能と責任が当事者にある事。

(1) 原則 職権探知主義

行政不服審査においては、**職権探知主義**が採用されている。

具体的には（27条）参考人に事実の陳述を求める

参考人に事実の鑑定を求める

（28条）証拠物権の提出を求める

（29条）検証を行う

（30条）審尋ができる

これらは全部、審査庁が職権でできる。

(2) 例外 当事者主義的要素もある

上記の（27条）（28条）（29条）（30条）は、審査庁は職権で行われるしまた審査請求人・参加人は「やってくれ」と、申立てもできる。

さらに審査請求人・参加人は

（26条）証拠書類の提出権

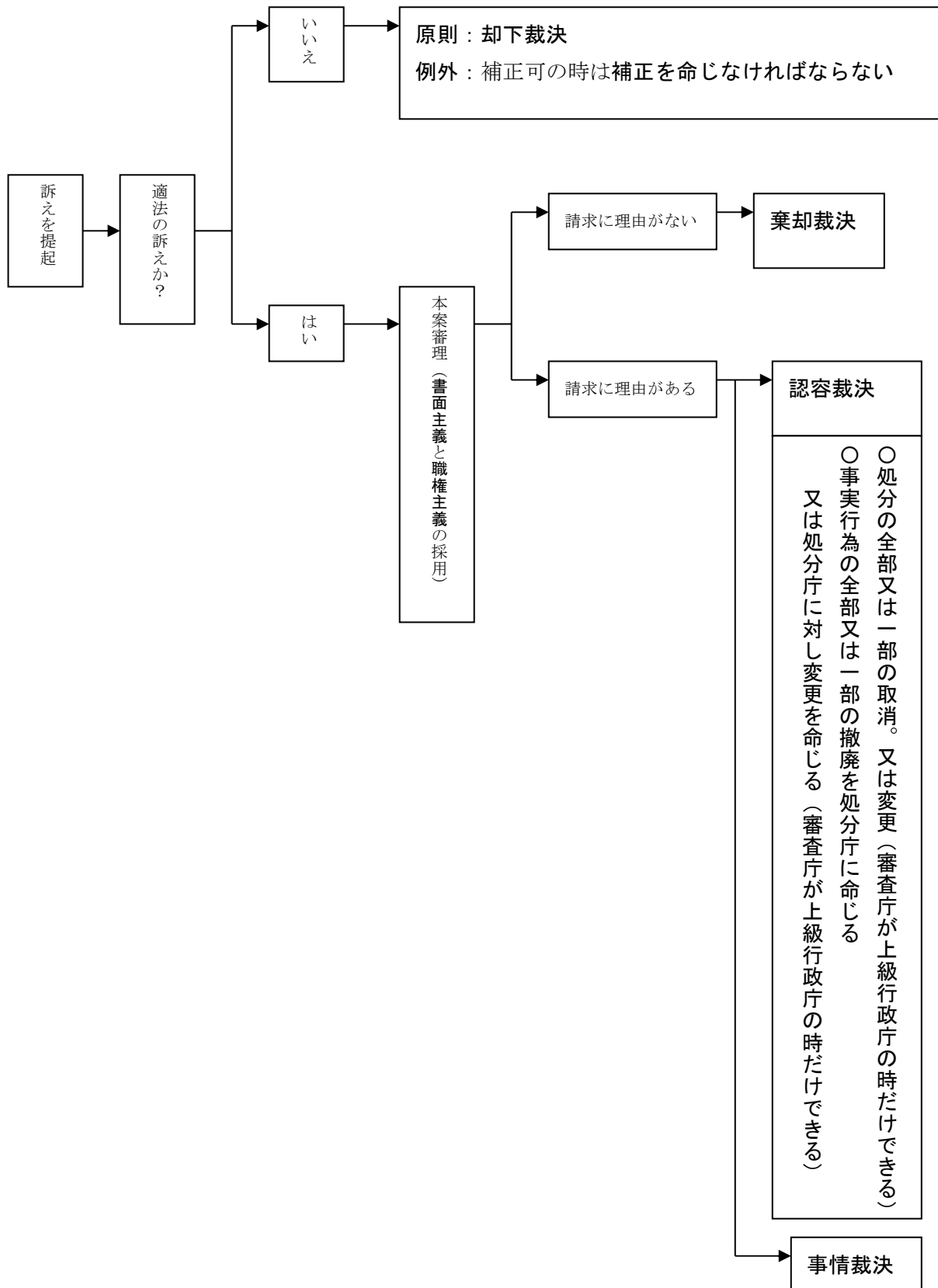
（29条②）検証への立会い権

（32条②）処分庁が提出した証拠の閲覧権

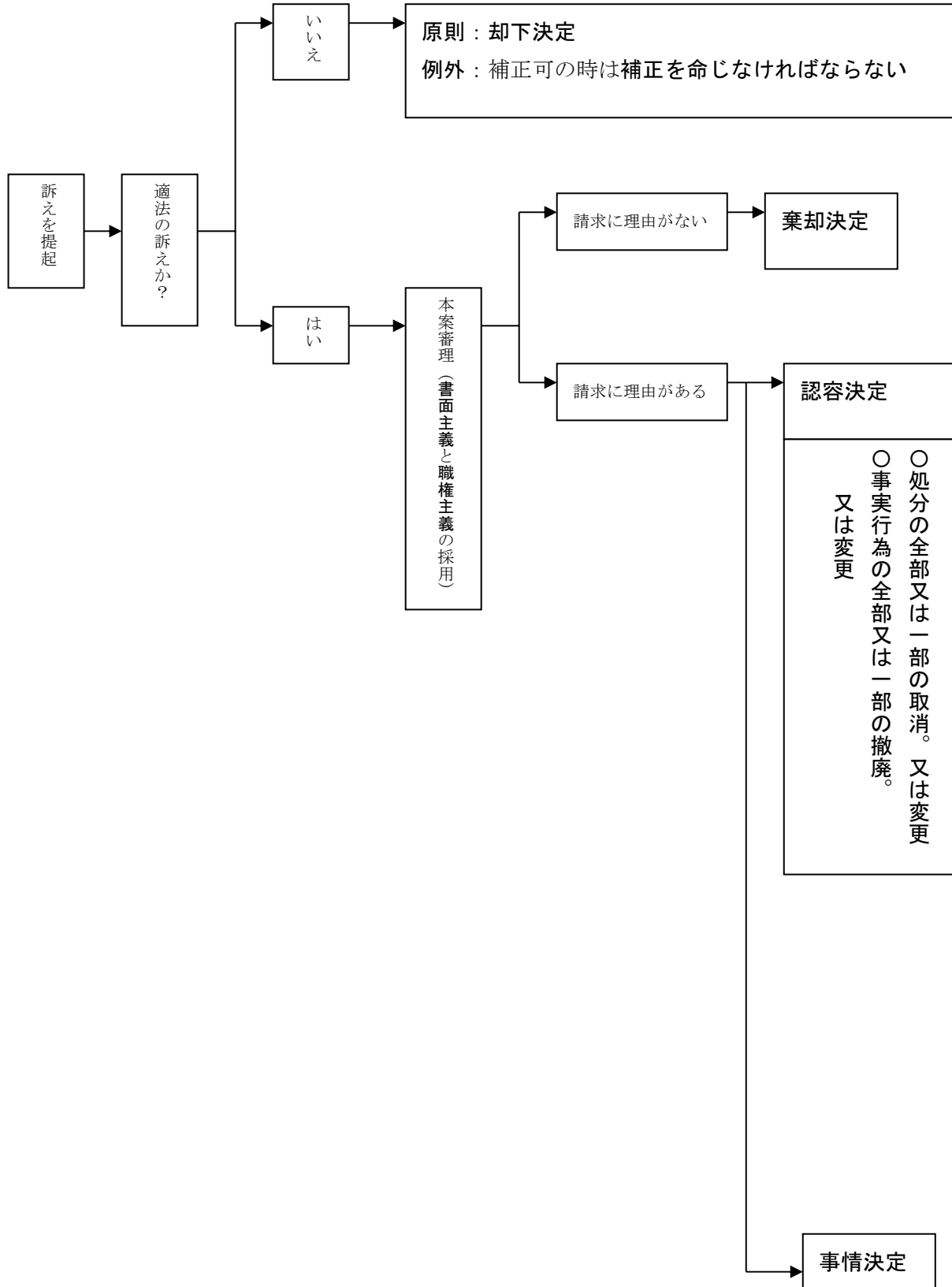
が認められている。

8 裁決および決定

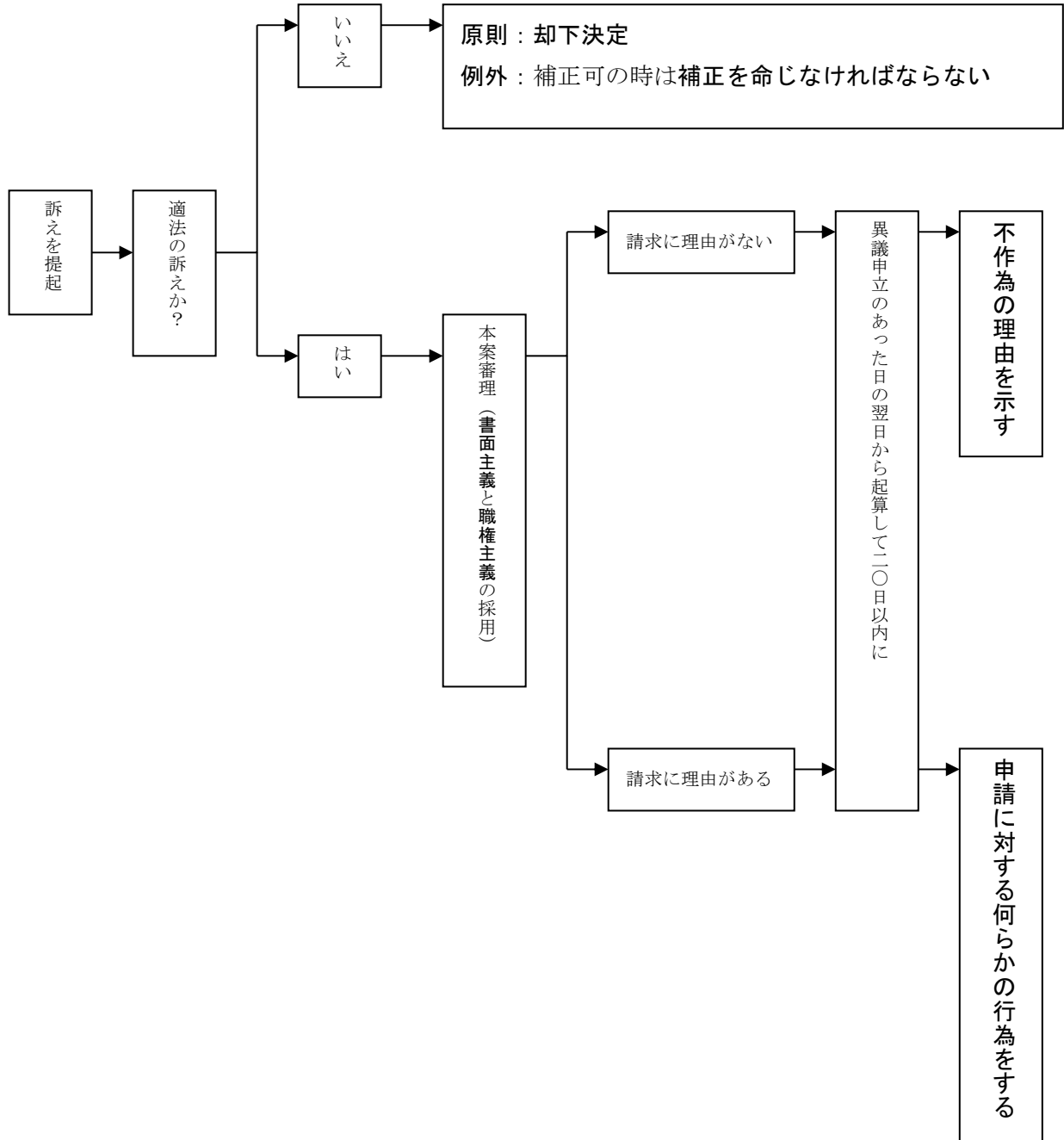
《処分に対する審査請求・再審査請求の場合》



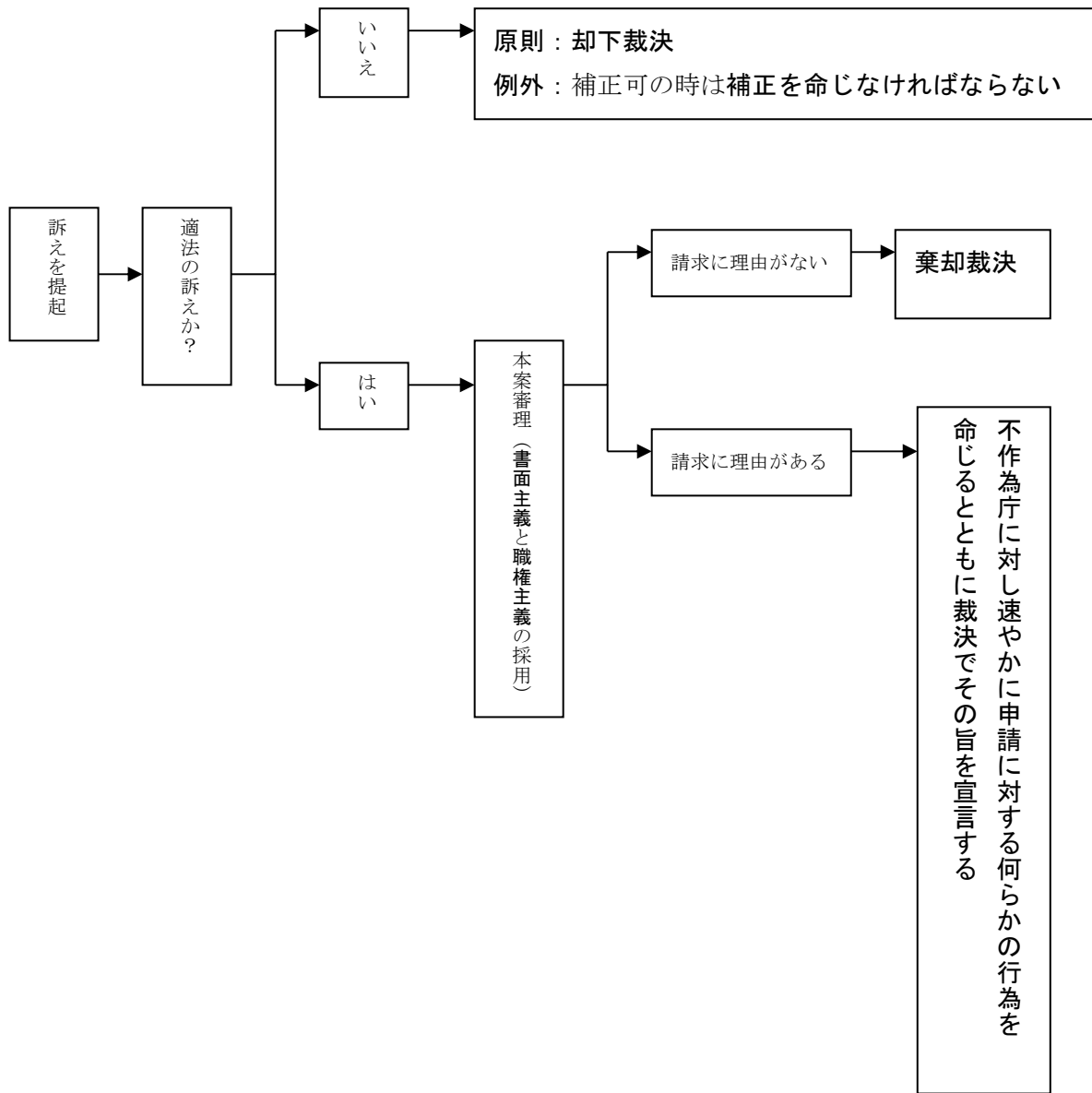
《処分に対する異議申立の場合》



《不作為に対する異議申立の場合》



《不作為に対する審査請求の場合》



8 裁決及び決定

5. 裁決・決定の効力

(1) 行政行為としての効力

(最判 S30.12.26) 公定力と不可変更力

農地委員会が先にした裁決を自ら取消すことは、不可変更力違反といえるが、裁決自体は独立した行政行為であるので、その違法が重大かつ明白の場合を除いては当然に無効となるものではない。

7 仮の権利保護手続

1. 執行不停止の原則と例外

原則：不服申立てがあっても

- 処分の効力は、停止しない。
- 処分の執行は、停止しない。
- 手続きの続行は、停止しない。

これを**執行不停止の原則**という。

例外：以下の3つ時には**執行は停止する**。

但し、「処分の効力の停止」は、「処分の効力の停止」以外の措置によっては目的を達する事が出来ない場合にしかできない。

(1) 審査庁が上級行政庁だった時

- ・ 不服申立人の申し立て + 必要があると認める時
- 又は
- ・ 職権 + 必要があると認める時

↓ 次の事が出来る

- ・ ○処分の効力 ○処分の執行 ○手続きの続行 の全部又は一部が停止することができる
- ・ その他の措置をすることができる（上級行政庁には処分庁に対して監督権があるので）

(2) 審査庁が第三者機関だった時

- ・ 不服申立人の申し立て + 必要があると認める時 + 処分庁に意見聴取

↓ 次の事が出来る

- ・ ○処分の効力 ○処分の執行 ○手続きの続行 の全部又は一部が停止することができる

（その他の措置はできない←第三者機関には処分庁に対する監督権がないからだよん）

(3) 審査庁による執行停止（義務）

- ・ 不服申立人の申し立て + 緊急の必要がある時は執行停止が**義務付けられてる**

但し例外もある（執行停止しなくてもよい場合）

- ① 公共の福祉に重大な影響を及ぼす恐れがある時
- ② 処分の執行・手続きの続行が出来なくなる恐れがあるとき
- ③ 不服申立人の申し立てに理由がないと思える時

3. 執行停止の取消し

審査庁は執行を停止した後も

- ・執行停止が公共の福祉に重大な影響を及ぼす
- ・手続きの続行が不可能
- ・事情が変更した

時は、執行停止を取り消す事が出来る

けんちゃんの用語チェック

- 「処分の効力の停止」とは、強制執行を伴わない処分であって後続処分のない処分の停止の事。
例えば、許認可等の拒否処分の停止や公務員の免職処分の停止の事
- 「処分の執行の停止」とは、強制執行の停止の事
- 「手続きの続行の停止」とは、不服申立や取消訴訟の対象となる処分の後に一連の処分や手続きが予定されている時に、それを止める事。
例えば、「課税処分」の取消しを求める時には「滞納処分」が手続きの続行にあたる。